

ミライロと関鑑×福岡天神のFMラジオ FUKUOKA2020

次世代を担う学生が成長企業を取材し、
自分が将来活躍するフィールドを探しにいくコーナーです。



学生スタッフ NPO法人学生ネットワークWAN

取材 ナレッジネットワーク株式会社
代表取締役社長 森戸 裕一氏

■今月の取材先 ナレッジネットワーク株式会社 とは？
“人材に情報を一”。2002年の創業以来、「人間力」の高い人材を育成するため、企業研修サービスにとどまらず、次世代のリーダー育成、学生間のネットワーク構築支援、地域の情報インフラ構築支援などの取り組みを通じ、学習する環境づくりの実現と情報や知識を価値に変えるソリューションを提供し続けている。

「テクノロジーが地方をアップデート」

全国の地方創生や中小・中堅企業のICT/IoT活用支援、次世代人材育成など幅広い事業を展開するナレッジネットワーク株式会社。今回は、そんなナレッジネットワーク株式会社の代表取締役社長 森戸 裕一さんにお話を伺った。

ナレッジネットワーク株式会社設立の経緯を教えてください。

まず社名ですが、その名の通り「ナレッジ（知識や技術）のシェアを行う＝ナレッジをネットワークする」という意味を含んでいます。今でいうと、スキルシェアのサービスを提供しているシェアリングエコノミーと考え方が似ていますね。ネットが普及してビジネス環境が変化していき、もはや会社の規模で勝負するような時代ではなくなってきていると感じはじめた2002年に独立し、さまざまな知識や技術を持っている人たちをネットワークするための会社を作りました。小さくても優秀な人材がダイナミックに活動できる会社を作れば大きな会社と同じことができるのではないかと考えた訳です。そのような背景で設立したのがナレッジネットワーク株式会社です。

そんなナレッジネットワークの強みはどのようなところですか。

働く上で規則を最低限にしているところですよ。何でもすべて決めてしまうと、社員はとりあえず定時に出勤して8時間働けばよいのだろう、と自らの思考を停止してしまいがちです。当社は、8時間以上働かない、ということ以外、細かい規則は

決めていません。時間ではなく、常に求められる結果を出す、ということを社員に求めています。もちろん、そのために、社外の方と協力してもらっても大丈夫です。そうすると、自然と仕事のスピードも速くなります。これは外資系企業に似ているのかもしれませんが、また、マネージャーはマネージャーの仕事を行う、ということも重要視しています。当社は、全国で企業や自治体のマネジメント研修を行っていますが、マネージャーの方がマネジメントの仕事をしていない場面によく出くわします。マネージャーは、時間と（部下の）能力と成果をマネジメントするのが仕事ですが、多くの方がそれを行わずにプレイングマネージャーとして部下の仕事のサポートに終始していることに驚くことがあります。仕事に費やした時間ではなく結果に注目し、以前よりも早く仕事が終わったか、部下の能力が上がっているか、を評価し、マネジメントすることが大切です。

ナレッジネットワークは地方創生事業を広く展開されていますが、なぜその分野に注目されたのでしょうか。

当社は、「何万人もの社員がいる大手企業よりも、10人未満の会社の方が面白い」と言われるような世界観を生み出そうとしています。その「大手企業」と同義語が、人口が一極集中している「東京」だと考えています。首都東京に人を集めて政治、経済をまわした方が効率が良い、という考え方が昭和時代の価値観だとすると、当社は、その価値観の真逆にあ

る地方創生に取り組んでいます。ただし、地方創生=東京分解、というわけではありません。地方を良くするためには、その地域のコミュニティと、地域外に住んでいるその地域が大好きな人、地縁血縁がある人が、ネットワークによってつながっている状態を作らなければなりません。いわゆる**関係人口**や**交流人口**といわれる人々を巻き込み、**コトを起こさなければ、本当の意味での地方の再生はできないと考えています。これもナレッジネットワークですね。**

地方創生事業を通して、今後、「**地方の不便を解決・解消して新しいサービスに変える**」がトレンドとなりそうだと感じています。地方都市を中心に、色々な不便を原材料として新たなビジネスを創り、それらを海外に輸出する、という産業がどんどん発展しそうです。引き続き、**日本経済のこれからの埋蔵金である「地方の不便」に注目していこうと思います。**

「地方の不便」が経済の原動力になる。考えたこともなかったです。

先ほども触れましたが、都市部にはモノやヒトが極端に集まりすぎています。それが、今回の新型コロナウイルスの集団感染などによって明らかになりましたよね。このような状況だからこそ、都市部ではできないが地方でできること、を考えないといけないと思っています。実際、人口密集地域では行えない、行いづらいという理由で、先端テクノロジーのさまざまな実証実験が、都市部から少し離れた地域で行われています。これらをみても、**新しいテクノロジーを使って面白いことを仕掛けるポテンシャルが地方にはある、と言えるのではないのでしょうか。**言い換えれば、地方創生は先端テクノロジーありきだということです。何もないところで新しいことをはじめる方が面白いのはクリエイティブの観点でも同じで、地方に注目する若いクリエイターが増えるのも、ごく自然なことだと感じます。

テクノロジーの利活用が今後ますます重要になってくるのですね。

たとえば、新型コロナウイルスの影響をうけた業界に、観光業や小売業、飲食業があります。これらの業界が潜在的に抱えていた経営課題のひとつに、デジタルの有効活用があげられます。デジタルの良さはわかっている、目の前の仕事が忙しく、面倒そう、難しそう、今のままで大丈夫、と後回しになり、従来の方法(折込チラシや呼び込み等)に頼りきってしまった、その結果、「ビジネスがマーケットに生かされていた」都市部では、外出自粛になった瞬間に客足がストップ…という状態になっています。もちろん、公的資金などによる救済は必要ですが、昨今の社会情勢とビジネス環境を踏まえる



と、たとえば飲食店の場合にはデジタル(ネット)を活用し、お店の存在・メニューやデリバリー等の各種サービスを幅広く知ってもらうことも大事で、そこに取り組んでいるか、新たにチャレンジしようとするか、は、とても重要です。**デジタルに対応できるかどうか、は今後も重要な鍵となりそうです。**デジタルに対応できると最終的にはコンテンツ勝負になりますので。

これからの時代に求められる人材はどのような人だと思いますか。

企業がヒトを雇用するとき、そのヒトの能力を測って採用の可否を決めますよね。昔は「(現代の)コンピュータの代わりになり得る能力」が高い人を優先的に採用していました。多くの物事を覚えておくことができ(記憶力)、計算も正確に早くできる人たちです。受験勉強の勝ち組という言い方もできるでしょうね。

しかし、現代求められる能力は、**コンピュータにはできないこと、たとえば、人の気持ちを理解し共感したり、チームをまとめたりすることができる能力ではないか**と思います。もちろん、人工知能などのITと「共生」する柔軟性も求められます。失われた30年と言われることもあります。最近ではスマートフォンなども爆発的に普及し、ビジネス環境は本当に大きく変わりました。**人生100年時代と言われる現代、記憶力や体力が低下しても働き続けたい50代以上の方々こそ、コンピュータやロボットの力を借りる、つまり、共生する、という考え方にシフトしていくべきだと思います。これは、コロナウイルスも同じかもしれません。闘うのではなく、共生することが重要です。**

これからの時代を担う若い人はコンピュータにはできない能力を身につけ、これまでコンピュータを活用してきた世代は人間にしかできない能力を身につけた若者を活用したマネジメント能力を身につけるべきではないでしょうか。

取材日：3月26日



■NPO法人学生ネットワークWAN とは?
設立17年目を迎える学生主体のNPO。「学生だからできない」「地方だからできない」を変えようと全国19地域の情報発信支援や、地域の関係人口をつくるコンテンツ企画運営をしている。私たちの運営するサイト「ガクログ」もぜひCHECK!!
してください!
<http://www.gakulog.net/>



■FMラジオ番組「FUKUOKA2020」とは?
福岡市中央区のコミュニティFM放送局「コミュニティラジオ天神 (FM77.7MHz)」にて、毎週木曜日19:00~ON AIR! 地域の情報・次世代ビジネス・地方創生などの最新情報について、大学生を中心とした若手メンバーとゲストで発信するラジオ番組。ラジオというメディアの新しい可能性を、ソーシャルメディアやスマートフォンファーストでビジネスを考えている世代が探っていきます。